

# ジョルジュ・サンドの『夢想者の物語』および 後期作品におけるプラトンの影響

Plato's influence on George Sand's *Histoire du rêveur* and later works

西尾 治子

NISHIO Haruko

## はじめに

ジョルジュ・サンドの作品には、ギリシャ時代の哲学者プラトンを想起させる場面や作中人物が登場する。その表現は間接的な示唆であったりあるいは直接的な表象であったりと多種多様な形をとっている。プラトン哲学の何がサンドを魅了し、それはどのように作品に取り込まれているのだろうか。本稿では、前期作品の『ある夢想者の物語』および『新・旅人の手紙』『犬と聖なる花』『祝杯』などの後期作品にみられるプラトン哲学の「人間球体説」「魂の永劫説」の影響を明らかにする。さらに、ソクラテスの死と妖精の王女の死を比較し、十九世紀中頃の有識者が傾倒した精神主義か科学主義かをめぐる論争および哲学者ピエール・ルルーの進歩思想にみるプラトン哲学の存在意義を検討することにより、サンドの目指した理想の文学とプラトン思想との関連性を考察する。<sup>(1)</sup>

## (I) 『夢想者の物語』における人間球体論

『夢想者の物語』(1830)には、明らかにプラトンの「人間球体説」の影響が認められる。「人間球体説」は、プラトンが紀元前四世紀に書いた『饗宴』の中で、ギリシャ喜劇の作者アリストファネスにエロスについて語らせる話の中に登場するが、もとを辿ればギリシャ神話に端を発している。その神話とは、次のようなものである。かつて人間は球体の形をしており、手足がそれぞれ二対あり、顔と局所も二対あった。この球体は、男アンドロ（男-男）、女ギュロス（女-女）、アンドロギュロス（男-女）の三種類の組み合わせにより構成されていた。球体人間は心臓も脳も二人分あったため極めて強力な生きもので、そのうえ高慢で反抗的だった。たびたび神々に歯向かう様子を見たゼウスは、この球体人間を二つに切断してしまった。切断された半身は本来の「完全」な姿になろうともう一方

の半身を求める。この完全を求めることが「恋愛エロス」であり、完全無欠な愛が成立するのは、この分身同士が出会った時なのである。<sup>(2)</sup>

『夢想者の物語』は、シチリアの火山エトナ山を訪れた若き孤独な旅行者アメデ Amédée が遭遇する神秘的な物語である。<sup>(3)</sup> アメデは、山中で野宿をした夜、高度な歌唱力をもつシチリアの少年に出会う。二人はともに旅を続けることになるが、クレーターに近づいたところで、大音響とともにエトナ山が爆発する。火山は恐ろしい勢いで溶岩を流れさせ、彼らのところまでやってきて、アメデは一気に骨の髄まで炎が侵入したとを感じる。見れば、自分の半身は溶岩に持っていかれ、燃えくすぶる溶岩の上に残っていた。目の前で突然美しい女性に変身した少年に髪を捕まれ、アメデは火山の深淵に飛び込む。そして揺れ震える炎の褥の上で夢見心地の時を過ごす、その見知らぬ少年（彼／彼女）の唇に触れたと思った瞬間、電気ショックのような衝撃に打たれ、気がつく、もと居た場所の「山羊の洞窟」の乾いた枯葉の床の上にいたのだった。<sup>(4)</sup>

主人公が「自分の半身が熱い溶岩の上に残っている」様を見るこの場面は、サンド自らが「聖なるプラトン」と尊敬する古代ギリシャの哲学者プラトンが書き起こした興をそそる不思議な神話「人間球体説」を想定していると思われる。<sup>(5)</sup>

では、サンドはどのようにして「人間球体説」を知ったのだろうか。ジョルジュ・リュバンにはよれば、サンドの住んだノアンの館にはヴィクトル・クーザン訳の『プラトン全集』全7巻が所蔵されている。サンドがこの全集を読んだかどうかについては定かではないが、少なくとも神話の概要は子供時代から知っていたであろうし、創作にあたり多くの資料を調べることを習いとしていたサンドがこの『プラトン全集』を参照したであろうことは容易に推測される。<sup>(6)</sup> いずれにせよ、「人間球体説」は当時の人々には神話の効用もあり、よく知られている説であった。

アメデの身体が二つに分けられ、この切断の後、彼は「妖精」ともいえる美しい女性に変貌した未知の歌い手と一体化し、パシュラールの言葉を借りるならば人間の理想の形である「全的な存在 être intégral」を完成させる。<sup>(7)</sup> アメデは現実（うつせみ）の彼方にある「両性具有の世界」へと身を投げる。こうして幻想的な世界で完全な愛のエロスが成就する。愛のエロスを完成させるのは、両性具有の美しい山の少年だけではなく、主人公アメデ自身でもあることを作者は暗に仄めかしている。彼はそのファーストネームによって、すでに二つの性の持ち主である。彼の名前アメデは、フランス語文法ではeのついた女性形となっているからであり、さらに、サンドが音楽の巨匠としてはショパンより優れていると評価したモーツァルトの名前でもあり、あるいは作家かつ作曲家のホフマンの名前でもあるアマデウス Amadeus を連想させるからである。<sup>(8)</sup>

少年と旅人はクレーターの中に身を投げるが、このめくるめく経験は「死」への落下あるいは跳躍であり自殺行為である。しかし、これは一瞬の夢にすぎない。二人の唇に触れた瞬間に、アメデは山羊の洞窟にいることに気づくからだ。見知らぬ歌い手における男性から女性への性の変化は、ユングの心理分析におけるアニマ（男性の中の女性性）アニムス（女性の中の男性性）理論を喚起する。男

でも女でもない、異なる二つの性を生きること、これこそがサンドが初めて書いた短編に描いた理想の愛の形であった。

同時代の作家たちと異なるサンドの独創性は、この作品にも見られるように男性性、女性性が交互に入れ替わる両性具有性を見事に作品化したことであろう。サンドはデカルト的レトリックを使い「我夢見る、ゆえに我見る（理解する・知る）」と言ったが、この夢見る人とはサンド自身のことである。夢見て理解するだけではなく、サンドはそれらを類い希な逞しい想像力によってフィクションにすることができた。エトナ山は実際に存在する山であるが、作家はエトナ山そのものを描写するというより、この火山が喚起する想像の世界と鮮烈なイメージを物語化している。

このように、『夢想者の物語』には「人間球体説」や「両性具有」「洞窟の比喩」といったプラトン哲学に馴染みの深いテーマが読み取られる。後述するように、サンドは後年、死後も魂は生き続け、その形は必ずしも人間ではなく、鉱物や動植物となって再び生を得て蘇るとする輪廻転生説を主張するようになるが、この時期はまだその前段階である。ヴィクトル・ユゴーが「エルナニ合戦」により三一致の法則に縛られる古い古典派を打倒しロマン主義の勝利を勝ち取ったばかりのこの時期に、サンドが構築した理想の物語世界は、プラトン哲学の神秘的な「人間球体説」に精霊の永遠の世界を取り入れた詩的で幻想的な世界であった。

『夢想者の物語』は描写の稚拙さが散見されるといわれる作品だが、1830年、若干26歳のサンドが鋭い感受性と豊かな想像力を土台に語りの手法を駆使し、プラトン哲学をフィクションとして作品化した成功例と言えるだろう。<sup>(9)</sup> そこにはサンドが信じる「理想の愛」すなわち「真実の愛、聖なる愛、魂の愛」がプラトン哲学の隠喩を媒体として描かれているのである。

次に、ソクラテスの死にまつわるサンド作品への影響を考察してみたい。

## (II) サンドの死生観

### 1. 『新・旅人の手紙』

毒人参は、ソクラテスが反対派の陰謀により飲み干さざるを得なかった死の杯に、毒薬担当の専門家が正確な致死量を配合した薬草である。サンドはこの毒人参のことを『新・旅人の手紙』の中で「歴史的植物」として次のように紹介している。

私は毒人参は情け容赦なく引っこ抜くことにしています。勝手にさせておくとあらゆるところにばびこってスペースを奪ってしまうからです。ですが、毒人参はとても美しく、歴史的な植物でもあるのです。その名前は永遠にパイドンの聖なる詩文に結びついています。キリスト教信者たちはどのような木が彼らの偉大な殉教者の貴い十字架になったかを言えないでしょう。しかし、誰

もが毒人参は十字架に賭けられた偉大な先人に穏やかで崇高な死を与えた毒草だということを知っているのです。罪も無いのによく効く毒人参よ、だからお前の名誉が回復されますように。死を与えるよう強いられ、自分は魂の最高位に到達できないことを知っていながら、動脈の最後の脈拍が止まるまで聖なる人の魂を純粋なまま意識をはっきりさせておくことができたのですから。<sup>(10)</sup>

サンドが言及している「パイドンの聖なる詩文」とは、その文章が非常に詩的で美しいとされるプラトンの著書『パイドン』のことである。「聖なる人」とは明らかにソクラテスのことを指している。「動脈の最後の脈拍が止まるまで聖なる人の魂を純粋なまま意識をはっきりさせておくことができた」と記しているが、これはプラトンが『パイドン』の中で詳述しているソクラテスの死の場面の再現であり、サンドがこの書を読んでいたという事実を証明している。<sup>(11)</sup> プラトンの描いたソクラテスの最後の様子は次の通りである。<sup>(12)</sup>

「死に臨んで嘆き悲しむ人を見たら、それはその人が実は知の愛求者ではなく物質の愛求者であったことの十分な証拠ではないだろうか。そして、その人間は金銭の愛求者か名誉の愛求者のどちらかであるか、あるいは両者であろう」と言って、あの方は晴れやかな様子で毒杯を受取り（・・・）いとも無造作に楽々と飲み干しました。<sup>(13)</sup>

ソクラテスはなぜ毒杯を飲まされ死んでゆかなければならなかったのだろうか。ギリシャの哲学者は自分が裁かれる死の法廷で「生きている限り哲学することをやめない」と宣言し、アテネ市民に向かっては「金や評判、名誉のことばかりに汲々としていて、恥ずかしくはないのか。知と真実のことは、そして魂をできるだけすぐれたものにすることには無関心で心を向けようとししないのか」と呼びかけている。<sup>(14)</sup> ソクラテスは「知と真実」を「金や名誉」に対置させ、これらの世俗的な欲望に汲々としているソフィスト（法律家）を相手に哲学思想の探求に身を投じていた。しかし、まさにその相手のソフィスト一派によって彼は死刑を宣告され、死んでゆく。ソクラテス亡きあと、恩師の遺志を受け継ぎ、師が闘った同じ手ごわい相手に対し、哲学者としての熾烈な思想的闘いに挑んだのが弟子のプラトンであった。師ソクラテスを死に追いやったアテネのソフィスト（法律学者）たちの「正義は状況や場所によって変わるとする主観的で変動的なドクサ（臆見）」に対しプラトンは真っ向から反旗を翻し、「客観的で普遍的かつ永遠と絶対を判断基準とするエピステーメ（知）」を中心に据えたアイデアの世界を構築したのだった。

『我が生涯の記』にサンドが記している次のような知見は、このプラトンの心意気と偉業を讃えていると考えられる。

「世の中には表現することが下手なゆえに不幸となる天才が存在する。彼らを世の中に知らしめる

には、プラトンのような人でも見つけない限り、時代の暗闇の中でかすかな光を放つものの、墓の中に自分の知性の秘密を持ち去るしかないのである。」<sup>(15)</sup>

「死は怖れるに値せず、むしろ希望である」とソクラテスに学んではいても、反対派の仕業により大切な恩師の命まで奪われるという不条理を前にし、プラトンは深い悲しみに暮れた。ニューヨークメトロポリタン美術館に所蔵されている画家ダヴィッドの絵画「ソクラテスの死」(1787)には、このプラトンの嘆きが写実的な筆致で描かれていることを付け加えておこう。<sup>(16)</sup> サンドが『新・旅人の手紙』で描写した自生している野の毒人参を情け容赦なく引き抜く様は、プラトンの悲嘆がサンドに感情移入されていると解釈しうるのである。

## 2. 「死は希望なり」:『祝杯』と二つの死

『祝杯 *La Coupe*』は、結核で死んでゆくマンソーにサンドが捧げた妖精達の国の物語である。この作品にもまた、二つの理由により、プラトンの影響が認められる。第一に「死は希望である」というプラトンの死のテーゼがこの作品の中で回帰的に登場すること、第二に妖精の国の王女がソクラテスのように毒杯を仰いで死んでゆくからである。<sup>(17)</sup>

サンドは妖精の死生観と人間の死生観をまったく正反対のものとして対照的に描いている。人間の死と妖精の死の相違を明確にしている重要なシーンは、ズイラが王女に「人間は肉体的には死にますが、魂は死ぬ事はありません。彼らこそ不死なのではないですか？永遠という深淵のなかでは、われわれこそ一時的な存在にすぎないのではないのでしょうか。」と問いかける場面である。人間を筆頭とする「地上の物はすべて死すべき運命にある」のに対し、永遠の運命を生きる妖精は地球が消滅しない限り死ぬことはない。妖精の王女は「わたしたちは地球が続く限り生き続け、地球と一緒に死ぬのです」と言うのである。

妖精たちにとっては、愛、幸福、情熱、苦しみ、感動といった人間的な感情とは無縁である。これらは、彼女たちの生命の存続に必要なエネルギーをいたずらに消費させることになるからだ。したがって、彼女たちは無感動で冷たい印象を与える。妖精の一人が述べるように「時間の深淵の中で世代が移り変わるのを見てきた妖精にとっては、一人の人間の命など、ちっぽけなものに過ぎない」。人間の死に対し妖精たちは何ら尊厳も抱かず、いかなる感動も抱かないのが通常なのである。

ところが、一人の妖精が氷河の亀裂（クラック）に落ちた幼い王子エルマンを助け出し、妖精の谷間に人間の子供を連れてきて以来、妖精たちの国には大きな変化がもたらされる。名前をもたない妖精の王女とエルマンを育てる妖精ズイラの二人の妖精は、魂や感情をもつ人間を理解しようとするようになるのである。一方、自分たちとは異なる人間に反感を抱いている妖精たちは、近い未来に自分たちの国がエルマンの子孫に侵略され、破滅することを恐れ、妖精の谷に住みついた人間たちを追放すべきだと主張し、彼女たちの世界を二分する大論争が起こる。エルマンは妖精の国で人間のベルタ

と結婚し、子供たちを設けていた。妖精たちの抗争を目の当たりにし王女は、人間のように魂の永劫を望むようになり、自らの世界と決別する決心をするのである。

さて、サンドが想像／創造する妖精の国では、女の妖精が国を治め、同性の妖精たちが国の掟を遵守することにより国が機能している。その王女がソクラテスのように毒杯を仰いで死んでゆくことになるのだが、王女と哲学王との死に至る過程はそれぞれ異なっている。次の引用は、プラトンがソクラテスの死に至るまでを実証的に描いた一節である。

いとも無造作にらくらくと毒杯を飲み干すのを見て弟子たちが悲しみと嘆きのあまり慟哭する中、ソクラテスはしばらくあちこちをあるきまわっていたが、やがて足が重たくなってきたと言って、仰向けに身体を横たえた。足の方から麻痺してゆくことを知っている毒薬担当官は、身体の一部を触れては感覚があるかソクラテスに聞いていたが、下腹部辺りまで来た時、弟子のクリトンが師に「他に言う事はないか」と訊いたが、返答はなかった。少し後で、びくりと身体が動き、顔の覆いを除けてみると、その目はじっと固くすわっていた。<sup>(18)</sup>

以上が『パイドン』に書かれているソクラテスの最後の様子である。

これに対しサンドの描く妖精の王女の死には、まったく異なっている。ソクラテスのように毒杯を仰ぐ決心をした王女は、死を目前にしズイラに遺言を残す。一つは、妖精の薬草や医学に関する知識をエルマンに伝授すること、もう一つは人間たちが科学の進歩により優れた医療を開発し、叡智と徳により殺人や無駄な争いをなくすようにという願いを込めた言葉だった。そして最後に彼女が毒杯を仰いだ後、断末魔の苦しみに襲われるようであったら、「死は希望なり」<sup>(19)</sup> という題目を繰り返してほしいとズイラに依頼する。<sup>(20)</sup>

ズイラの涙を前にして決心が鈍ることを恐れた王女は、彼女に「永遠にこの世を去って ゆく前に、地上の美の純粋な発現を見たいから薔薇の花を持ってきて欲しい」と頼んだ。ズイラが戻ってくると、王女は氷河の塊の側に座っていた。頭を無造作に腕の上にもたれさせて。もうひとつの手はぶらりとぶらさがり、空の杯は衣服の端に転がっていた。ズイラは彼女が眠っているのだと思った、しかし、その眠りは死だったのである。<sup>(21)</sup>

三日間待ったが、王女の覚醒はおこらなかった。ズイラは静謐でおごそかな顔がゆっくりと硬直してゆくのを見た。彼女は絶望して逃げ去った。氷は次第に彼女の顔の輪郭の上にさらにひろがってゆく忘却を石化させ、その美しい生命を石像に変えていった。<sup>(22)</sup>

このように、ソクラテスと妖精の王女の最後は、毒薬、遺言、硬直といった幾つかの要素の類似性

を別にすれば、違いが歴然としている。哲学者は妻子や愛人を遠ざけ、男性のみの複数の弟子達にみとられ、男の死を迎える。今際の際の描写は、科学的かつ実証的である。また、彼が遠ざけるのは女子供であり、同性の男たちは自分の側に置いている。そこには、女たちの気持ちを傷つけないという気遣いもあるだろうが、それ以上に「男には男の世界がある」とする女性排除の論理が見え隠れしているとは言えないだろうか。

ソクラテスはまさに毒薬を飲む直前に、毒薬担当官に杯の中の一部を神に捧げてよいかと尋ねている。担当官に毒薬はきっちり致死量が測ってあるのでそれは不可能だと断られるが、この場面は死の直前のソクラテスに一瞬のためらいが生じたことを匂わせている。最後の彼の言葉は、弟子のクリトンに言った「アスクレピオスに鶏のお供えをせよ」という一言だった。<sup>(23)</sup>

これに対し、妖精の王女は、妹と呼ぶ最愛の友に薔薇の花をもってきてほしい、と言って故意に彼女を自分から遠ざけ、誰にもみとられることなく、孤立無援の中で死んでゆく。他者の存在は決意を鈍らせると考えたからであった。ここには、一瞬の躊躇をみせたソクラテスより屈強の信念と志をもつ妖精の王女の決断力と勇気が垣間みられる。王女の行動は文化範疇の視点からみれば、男性的ですらある。氷にもたれかかって死ぬという死後の始末に配慮をみせている点で、そのすべてを周囲が面倒をみってくれる恵まれた男性ソクラテスとも異なる。男性哲学者の場合は、男が周囲に甘え、側近がそれを見守っている。王女の場合には一切の甘えがない。このように、妖精の死は、極めて男性的でもあり女性的でもあるといえる。と同時に、ここには、永遠の別れという究極の状況においてすら現出する、男と女の間の対比—友情と尊敬に暖かく包囲されて死を迎える男と孤立無援の冷たい氷に囲まれて死んでゆく女—この二つの対比は、死までが男と女を乖離させてしまう不条理を象徴している。

妖精の王女は、男性をも凌ぐ世界観をもっている。来世や人間の未来を見据え、果てには、妖精の国の存続だけでなく人類の永遠の進歩を願う。その広大な世界観は「王女の優れた知性」と人徳ならぬ「妖精の徳がもたらしたものである」と作者は記しているが、このようにサンドの描くヒロインは時として男性に負けるとも劣らぬ卓越性を示すのである。

この物語の最後を締めくくっている「死は希望なり」という一行が、弟子たちに残したソクラテスの教えを暗示していることは、サンドとプラトンの哲学上の緊密な結びつきを示す証として注目すべきであろう。死んでゆく妖精は、毒杯を仰ぐという行為において、さらに死後の永遠の魂を信じるという点において、ソクラテスと二重写しである。サンドの物語世界では性がしばしば反転する。こうした男女の反転現象は、サンドの物語世界では回帰的な現象であり、作家の創作技法の常套手段となっているといっても過言ではないだろう。そこでは、ややもすれば、女性作家に期待される「待つ女」や美人薄命の「受け身の女」はヒロインとはなりえない。サンドが「ジェンダートラブル」を起こす作家、社会通念を「転覆させる作家」と呼ばれる所以である。<sup>(24)</sup> その小説世界に登場する作中人物たちは「男でもあり女でもあり」そしてまた「男でもなく女でもない」のである。

このように性差が問われない物語世界が展開する『祝杯』の中で作者が繰り返し強調しているのは、男女を問わず真実の魂を求める「真理の旅人」にとって、死は希望であるということである。希望とは理想でもある。サンドが死にゆくマンソーに伝えたかったのは、死が希望であり理想なのだという最大の愛を込めたメッセージであり、それはとりもなおさず、プラトンの理想の哲学を示唆していると言いうるだろう。

### 3. 輪廻転生説とフロベール：『犬と聖なる花』『花たちのおしゃべり』

1860年代後半に書かれたサンドの一連の童話の中にも、その源がプラトン哲学に遡ると思われるサンド独特の「輪廻転生説」が登場している。『おばあさんの童話集』に収録されている『犬と聖なる花』に登場するウィリアムさんは、自分がビルマの蒸し暑い雨期を生きた白い象で、そこでは「聖なる花」と呼ばれていたと話す。また『花たちのおしゃべり』のルシアンさんは、石、チョウチョ、フレンチブルドッグ等の動物の前身を経て、今や人間のルシアンさんになっていると告白する。ルシアンさんはさらに、前世では「白いうさぎ」や「白い馬」と呼ばれてうれしかったことを憶えているが、死ぬ時の事は憶えていないとまで言うのである。<sup>(25)</sup>

輪廻転生説においては、メタモルフォーズ *métamorphose* は死後の魂が同じ生命体に宿るのに対し、メタンプシコーズ *métempsychose* は魂が人間のみならず鉱石や動植物にも宿るとしている。サンドは、ルシアンさんの話が如実に示しているように、後者を踏襲している点に着目しておきたい。<sup>(26)</sup>

ところで、前世が犬であったというルシアンさんの突飛なことのように思われる発想は、しかしサンドにとっては決して物珍しいことではなかった。というのはサンドは「自分には風変わりな兄がいて「僕は前世では犬だったんだ」とよく言っていました。私は自分が植物か鉱石だと思います」と手紙に書き残しているからである。<sup>(27)</sup>

こうした過去を思い出す記憶の行為は、プラトンが『メノン』の中で説明している「想起説 *réminiscence*」に通底する。プラトンによれば、われわれの知識は身体に化身される前のかつての状態を想起したものにすぎない。ゆえに「知るとは思い出すこと」なのであり、探す事と学ぶ事は同じ一つの行為なのである。この想起説はプラトンが『パイドン』で述べている「魂の不死」という考え方に依拠している。つまり、肉体は滅びても魂はすべての知を保有し続けるというもので、『祝杯』で妖精の王女が拠り所とした理念であった。

### (III) 唯心論か唯物論か

サンドがプラトン哲学に魅了された理由は、前述したようにミクロの視点からは作家自身の個人的興味に由来すると考えて齟齬はないと思われるが、マクロの観点から時代を概観した場合、当時の出



版翻訳文化および科学の台頭に代表されるフランス 19 世紀社会の思想潮流を無視することはできない。<sup>(28)</sup>

魂か肉体か、換言すれば、イデアリスムスかマテリアリスムスかという問題は、19 世紀の人々にとって重要な哲学的テーゼであった。というのは、その頃、科学哲学分野では大きな刷新が起こり、それまで同一のカテゴリーに入れられていた哲学と科学が袂を分かつことになったからである。1834 年、「英国科学振興学会 BAAS-British Association for of Advancement of Science」は、実情に合わなくなった「自然哲学者」という呼称を改め、「科学者」という新造語を誕生させた。科学者とは「物質世界に関する知識の研究者」を意味した。以降、19 世紀中頃から科学主義のイデオロギーが広く一般的な思想状況を支配するようになり、その大勢は 1950 年頃まで続いたのであった。<sup>(29)</sup>

こうして、19 世紀はカバニスの精神と肉体の関係論とともに始まったとさえ言われるように、フランスには科学主義を強く支持する多くの知識人が出現することになった。<sup>(30)</sup> シャルル・ド・レミューザが、「カバニスにおいては、胃が食物を消化するように、脳が思想を消化する。かくして思想は分泌する」<sup>(31)</sup> と述べたようにカバニスの科学主義の勢いにはすさまじいものがあった。言い換えれば、「19 世紀は科学と信仰、唯心論的精神主義と物質主義のマテリアリスムスのイデオロギーの対立と葛藤の世紀」だったのである。ロマン主義者は霊的なものを化身としてあるいは感覚として理解する一方で、実証主義者は現象を関係性の総体として捉え、伝統的な形而上学を拒絶した。また、改革派は継続的な世界観を力強く推進し、精神であろうと物質であろうと、存在の永劫的な基盤を構成するとみなされる本質の不動性に反対したのであった。

科学万能主義のマテリアリズムの風潮に対抗し、イデアリズムの重要性を強調したのが、サンドに近いポール・ジャネ Paul Janet やジャン・レイノー Jean Reynault であった。折しも、『プラトン全集』の仏語訳全 13 巻 (1825-1840) がギリシャ語に堪能であった哲学者ヴィクトル・クーザンの翻訳により出版され、科学主義の猛威に対しプラトン哲学が唯心論の旗手となって抵抗していた。フロベールが恋人の詩人ルイズ・コレに「君は理想が好き」なのだから、「哲学者の翻訳によるプラトンを読むように」と助言し、姪のカロリーヌへの手紙で『饗宴』を読むようにと勧めたのは、このクーザンの翻訳版であった。<sup>(32)</sup> また、アルフレッド・フイエ Alfred Jules Émile Fouillée(1838-1912)は、1867 年および 1868 年にプラトンとソクラテスの研究によって二つの賞を授かり、道德科学アカデミー学士院会員となり、彼もまたプラトン哲学を強力に擁護していた。

サンドは、『両世界評論』に 1868 年 5 月 15 日に掲載された ポール・ジャネの「19 世紀におけるフランス唯心論 Le spiritualisme français au XIXe siècle」を読み、ジャネの論考は「希望や願いが自分と似ているから手紙を書きたくなった」と本人に手紙を認めている。<sup>(33)</sup>

サンドはこのように唯心論的立場をとるポール・ジャネに共感を覚えているが、他方では物質主義も唯心論も取り入れつつ第三の道を提唱するピエール・ルルーの「人類の進歩説」を信じていた。<sup>(34)</sup> したがって、科学主義を全面的に否定していた訳ではなかった。このことは『祝杯』の妖精の王女の

次のような遺言に象徴的に表れている。

貴女はエルマンに教えてね。彼にまずこの科学（知識）においては人間がわれわれ妖精を超えるよう努力する事、なぜなら、人間はお互いに助け合い永遠に闘わなくてはならないからです。（…）叡智により人間は人殺しを無くすでしょう。科学により病を追放するでしょう。<sup>(35)</sup>

当時の二つの思想潮流におけるサンドの思想的位置は、したがって唯心論一辺倒であったとは言い難い。少なくとも 1867 年頃までは、ルルーのように科学の発展と人類の進歩を願っていた。しかし 1868 年には、サンドはルルーの元を離れていったルイ・ヴィヤルドに、より親近感を抱いていた。<sup>(36)</sup> 「あなたは長い間ルルーやジャン・レノーの非常に宗教色の強い哲学とともに生きてきました。あなたは（…）彼らの哲学に別れを告げました。（…）私もよく考え、少し自分の考えを変えました。（…）真実の愛と自由の敬愛で団結しましょう」とサンドは述べ、ルルーとの距離を明確にするようになったのだ。<sup>(37)</sup> 二人が疎遠となった一因は、ルルーがメタモルフォーズ説であるのに対し、サンドがメタンプシコーズ説に傾倒するようになり、このように死後の世界観の捉え方に違いが始まったからでもあったと考えられる。<sup>(38)</sup>

これまでのサンドの諸作品の分析からも明かなように、サンドが最も理想とする哲学は、愛につながる知の哲学であり、プラトン哲学に代表されるドクサ（臆見）ではないエピステーメ（理性にもとづく知）を目指していたことに変わりはないのである。

## おわりに

初めてサンドが同時代の哲学者ピエール・ルルーに言及した手紙に「ルルーの記事はとてもよく書けています。私はとても好きです。彼がヴォルテールをあのよう批判的に扱い、私の聖なるプラトンをあれほど見事に論じてくれたことに感謝しています」<sup>(39)</sup> と書かれているように、1836 年にはすでにサンドは、ルルーとプラトン哲学に対する強い関心を示していた。『スピリデイオン』や『コンスエロ』『ルードルシュタット伯爵夫人』の創作に多大な影響を与えたルルーであった。60 年代後半にサンドとルルーは疎遠になっていったが、しかし、サンドがルルーと決別したと考えるのは、一面的に過ぎると思われる。サンドは『スピリデイオン』の最終章で「死人は墓という聖域を離れることなく、感じ取れるような形となってわれわれに教えたり語りかけてくる。彼らはわれわれの中に生きているのです」と書いているように、サンドはルルーと同様に、重要なことは世代から世代へと引き継がれる人類の継続と進歩であると考えていた。

1868 年代後半、サンドは、近しい友人たちであるルルー、ジャネ、レイノー、ヴィヤルドとともに

に、物質中心主義の流れに反対し理想主義の重要性を提唱していた。先述したように、サンドは同時期に『両世界評論』の記事の中で、アルフレッド・フィエが科学一辺倒主義に反対して著したプラトン研究（アカデミー道徳科学アカデミー賞受賞）を絶賛している。当時は科学主義に対して闘うためにプラトンに助けを求めていたのであった。

サンドのプラトン哲学への関心は若い頃から晩年まで一貫して消えることはなく、その影響は作品に回帰的に登場している。厳格に理想を追求するプラトンの哲学志向がサンドが目標とする理想の文学の創造に通底する深さを備えていたからでもあったと推測される。

『ある夢想者の物語』では「人間球体説」が、『スピリデイオン』『コンシュエロ』ではルルーの哲学思想がサンドの創作を支えた。後年の魂と死後の世界に関する理想を探求する『新・旅人の手紙』『祝杯』や童話集では、サンドはプラトンの「魂の永劫説」「想起説」「無意識的記憶」を創作の手がかりとした。サンドはプラトンの哲学思想から文学創造の糧となる端緒を見出し、人類が生きて死に、魂として存続することの理想を高らかに物語化した。強調すべきは『祝杯』で考察したように、サンドはプラトン哲学に欠けていたジェンダー思想を自らの創作に補足し、作品を完成させたことであろう。「理想」を探求するサンドが、おしなべて「最強の敵と闘う理想主義者」あるいは「最高の理想主義者」と形容されるプラトンの理想主義哲学を意識し、人生の最後で再びその哲学思想の源に遡り、プラトン思想を創造する作品に鑲め、自らが目指す理想の文学を構築したのは、自然のなりゆきであり自明の理でもあったといえよう。<sup>(40)</sup>

## 注

- (1) 納富信留『プラトン 理想国の現在』慶応義塾大学出版会、2012。「理想」という言葉は仏教や儒教あるいは国文学でも用いられていなかった、西周による純然たる造語である。（・・・）江戸時代までに培われた伝統の上に、十九世紀半ばから西洋より移入された「哲学」（フィロソフィア）は、一世紀半の時を経て、日本の社会と文化をここまで形づくってきた。」「序」より  
ジョルジュ・サンドの作品とプラトン哲学に関する先行研究は、部分的に作品との関係を示唆した欧米の研究が散見されるが、サンド文学におけるプラトン哲学の影響を系統立てて論じたのは本稿が初めてである。なお本稿は2013年6月にベルギーのルーヴェン・ラ・ヌーヴ大学において開催された「国際ジョルジュ・サンド大会（テーマ：「ジョルジュ・サンド：理想を描く」）における本稿執筆者の仏語による口頭発表原稿に加筆し修正を加えたものである。
- (2) 『饗宴』のミュートス「人間球体説」は、わたせせいぞうのコミック作品『菜』の中で使われるほど現代では知られるようになっている。プラトンが『対話篇』において問答と並列させたりあるいは問答の代わりに神話を使う理由について、國方は著書の中で「対話の相手が、論理では納得できても情念ではまだ納得しきれていないとき、説得のためにミュートス（神話）が提起される」と述べている。國方栄二『プラトンのミュートス』、京都大学学術出版会、2007。藤沢令夫『プラトンの哲学』、岩波書店、2012（第8刷）
- (3) ジョルジュ・サンド『夢想者の物語』前掲書、p. 576。『夢想者の物語』の舞台となっているシチリア（シケ

リア)は、40歳のプラトンが「アカデメイア」という学園を創設するために下見に行った地であり、当地の専制独裁政治の実態を観察する機会となった。さらにプラトン哲学に大きな影響を与えたピタゴラス派の靈魂不滅の思想や数学を知ったのもこの地シチリアであった。中野幸次『プラトン』清水書院。P.66-67。「聖なるプラトン」という表現は、プラトンを尊敬するサンドがその後強い影響を受けることになる哲学者ピエール・ルルーに初めて言及した1836年12月の書簡の中で使用している。

- (4) 洞窟の比喩は、教育分野で重視されるプラトン哲学の「魂のふりかえ」説を喚起する。
- (5) Il passa, et Amédée se sentit, pénétré jusqu'aux os par la flamme dévorante. Il se retourna et vit son corps à demi consumé que la lave emportait loin de lui et dont les misérables débris flottaient sur une mer de feu. Au même instant, ce qui restait de lui se sentit entouré par des bras voluptueux, et son compagnon au manteau rouge devint une femme plus ravissante que houris tant vantées du Prophète. George Sand, *Histoire du rêveur* in *Œuvres complètes* 1829-1831 *George Sand avant Indiana*, vol.1., Sous la direction de Béatrice Didier, Edition critique publiée par Yves Chastagnaret, Champion, 2008.p., pp.485-568. p.
- (6) George Sand, *Correspondance*, t.II., Classiques Garnier, p.820. Note par George Lubin : *Les OEuvres de Platon* en 7 vol, traduction Victor Cousin(Paris, Bossange, 1822-1834) s'y trouvent aussi sous le no 669.
- (7) Gaston Bachelard, *Poétique de la rêverie*, PUF, 1971, p.75.
- (8) 音楽家たちの正確なファースト・ネームは、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト、エルンスト・テオドール・アマデウス・ホフマンである。アマデウスは、フランス語ではアメデとなる。
- (9) “C'est toute évidence, l'œuvre d'un écrivain novice, fragmentée et marquée par uen rhétorique passablement extravagante, une certaine gaucherie aussi. “Isabelle Naginski, *George Sand. L'écriture ou la vie*, Paris, Honoré Champion, 1999,p.53.
- (10) *Nouvelles Lettres d'un voyageur*, Calmin Lévy, 1877, p.82
- (11) 藤沢令夫編『プラトン』岩波書店 2012、p.67-72
- (12) 『パイドン』: ソクラテス処刑の日に獄中に弟子達が集まり、死について議論する設定となっている。ソクラテスの死についての考えが述べられ、ついで靈魂不滅について話し合われている。パイドンとはエリス学派の創設者である哲学者エリスのパイドンを指し、ソクラテスの臨終の場に居合わせなかったピュタゴラス学派の哲学者エケラテスにその様子を語るという設定になっている。プラトン、岩田靖夫 訳『パイドンー魂の不死について』岩波書店 1998 参照。ソクラテス死刑の罪状は「国の認める神々を認めず、別の新奇なダイモーンの祀りを導入するという罪を犯し、かつまた青年たちに害毒を与えるという罪を置かしているから」であった。藤沢令夫『プラトンの哲学』岩波新書 2012 (8刷), p.2, p.23-28 参照。
- (13) 『プラトン』前掲書、p.70.
- (14) 同書、p.56. (『ソクラテスの弁明』290D-E.)
- (15) ジョルジュ・サンド、加藤節子訳『我が生涯の記』t.I., p.43.
- (16) ダヴィッド作「ソクラテスの死」(1787) ニューヨークメトロポリタン美術館
- (17) George Sand, *La Coupe*, Paris, Michel Lévy, 1865, pp.8-9.
- (18) 藤沢令夫、『プラトン』、平凡社、1977.p.67-72.
- (19) “La mort, c'est l'espérance.” *La Coupe*, Calmann Lévy, 1876, P.112.
- (20) この物語の中でライトモチーフのように何度も登場する「死、それは希望である」というこの文言は、ソ

クラテスが弟子たちに残した教えとまったく同じであることは注目に値する。

- (21) *La coupe*, Op.cit., P.106.
- (22) *Ibid.*, P.107.
- (23) 藤沢令夫 (のりお)、前掲書、p.72.
- (24) Cf. Pascale Auraix-Jonchière, Simone Bernard-Griffiths, *La marginalité dans l'oeuvre de George Sand*, PU Blaise Pascal, 2012.
- (25) George Sand, *Contes d'une grand-mère*, II, Glénat, 1995, p.71-108.
- (26) プラトンの哲学は、魂は不死であり輪廻転生するという前提に立っている。また想起説とは次のようなものである。私たちは生まれる前にながしかのアイデアを見ていた。しかし生まれるときにそれを忘れてしまう。私たちは生まれてから感覚などを契機として忘れられたアイデアの記憶を「思い起こす」。つまり学習とは想起に他ならない。プラトンの想起説とプルートスに関しては次の論考を参照した。中村栄子『ブルーストの想像世界』、駿河台出版社、2006。菊池博子『『失われた時を求めて』における想像力と感受性―「無意志的記憶」の事例をめぐる―』人間文化創成科学論叢』(お茶の水女子大学) 2009。
- (27) サンドのフロベール宛の手紙 (1866 年 10 月 1 日付)。この手紙は、『ボヴァリー夫人』の作者が「自分はファラオンの時代に遡る記憶を持っている」とサンドに書いてきた 1866 年 9 月 29 日付の手紙に応えたものだった。Corr.t.XX.,p.136. « J'avais un frère très drôle, qui souvent disait : du temps que j'étais chien... Il croyait être homem très récemment. Moi je crois que j'étais végétal ou pierre. » サンドが風変わりな兄と言っているのは、父モーリスと小間使いとの間に生まれた腹違いの兄の Hipolyte Chatiron のことと推測される。
- (28) この問題に関して、二人の作家の間でも議論が交わされている。例えば、フロベールからサンドへの手紙。1876 年 4 月 3 日。1844 年に神経症を煩ったフロベールは、この問題を物質主義と精神主義という単純な二項対立のテーゼに還元してしまう当時の哲学に不満を抱いていたが、自身の探究の結果たどり着いたのがフロベール流の矛盾した一元論の「物質精神主義」であった。Cf."L'âme et le corps chez Flaubert : une ontologie simple", op.cit., *Revue d'histoire des sciences*, Vol. 35, 1982, pp. 367-369., 村松正隆, 「感覚性・共感・模倣:カバニスの人間学を巡って」跡見学園女子大学マネジメント学部紀要 創刊号,2003,pp.103-115.
- (29) 藤原令夫『プラトン』岩波新書 2012 (8 刷) p.6-7.
- (30) Cf. «L'âme et le corps chez Flaubert : une ontologie simple” 単純存在論 par Juliette Azoulai.
- (31) Pierre = Jean = Georges Cabanis (1757-1808) : « son cerveau digère les pensées comme l'estomac digère les aliments, et opère ainsi la sécrétion de la pensée »。
- (32) ここでフロベールが言及している哲学者とはヴィクトル・クザン (1792-1867)のことで、彼はルイーゼ・コレがフロベールの恋人となる前の愛人であった。Cf.Jacques Derrida, « Une idée de Flaubert : « la lettre de Platon » in *Revue d'Histoire littéraire de la France*, juillet-octobre, 1981, pp658-676.
- (33) サンド、1868 年 5 月 9 日付けの手紙。"Le spiritualisme français au XIXe siècle" in *La Revue des Deux Mondes*, le 15 mai, 1868, pp.353-387.
- (34) ピエール・ルルー (1794-1871) 哲学者。政治経済学者。1841 年にサンドと『ルヴュ・アンデパンダント』を創刊。サンドは長年の間、子沢山のルルーに経済的援助を惜しまなかった。ルルーの影響はサンドの『スピリデイオン』『コンスエロ』『レードルシュタット伯爵夫人』に反映されている。
- (35) *La Coupe*, *Ibid.*, pp.104-115.
- (36) "Vous avez vécu longtemps de la philosophie de Reynaud et leroux. Vous l'avez quittée sans subir

d'autre influence que celle de vos réflexions et vous avez usé du droit sacré de la liberté.(...) Et moi aussi,(...)j'ai réfléchi et je me suis insensiblement modifiée.(...) Unissons-nous dans l'amour du vrai et le culte de la libre pensée. “: Lettre de George Sand à Louis Viardot, le 10 juin, 1868. *Corr.t.XXI*, p.13.

(37) Lettre à Louis Viardot, le 10 juin, 1868. *Corr.t.XXI*, p.13.

(38) George Sand énonce sa foi en une métempsychose ou réincarnation, c'est-à-dire le retour de l'esprit dans un nouveau corps. Elle puise cette croyance directement dans la doctrine de Pierre Leroux pour qui vivre c'est renaître et persister au sein de la même espèce. Ainsi, après la mort (du corps), l'esprit reprendrait immédiatement «les fonctions de la vie organique et par conséquent le vêtement de la matière » (*E*, p.274). “Une croyante spiritualiste : George SAND “, Annie CAMENISCH, IUFM d'Alsace, Article paru dans :Vives Lettres N°7, Spiritualité et esthétique II, Université Marc Bloch, U.F.R. des Lettres, 1<sup>er</sup> semestre 1999. *Les Amis de George Sand* N°22, 2000. サンドは 1844 年頃からルルーの手紙に返信しなくなっていた。

(39) 1836 年 2 月 23 日『両世界評論』の編集長 F.Buloz に宛てたサンドの手紙。“L'article de Leroux est très bien et me plaît beaucoup. Je lui sais gré de traiter si mal M. de Voltaire et si bien mon divus Plato.”Cf. Pierre Lacassagne, *Histoire d'une amitié*, Klincksieck, 1973, p.8.

(40)「プラトンは最高の理想主義者である。しかし理想主義についてすぐに連想されるような主観の閉塞とは無縁である。彼は自分をただ甘やかしてくれるような自分に都合のいい考えだけを取り入れてそれ以外は考えようとしないうようないい気の理想主義者ではない。彼はいつも最強の敵と戦う理想主義者なのである。」田中美知太郎 中央公論社 1978 p.17.